

「宮清め」

2015年11月21日

ルカによる福音書 19章 45節～48節。それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで商売をしていた人々を追い出し始めて、彼らに言われた。「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家でなければならぬ。』／ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にした。」毎日、イエスは境内で教えておられた。祭司長、律法学者、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀ったが、どうすることもできなかった。民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていたからである。

上記の出来事は「宮清め」と言われている。エルサレム神殿の庭は奥から順に「祭司の庭」「イスラエル人の庭」「婦人の庭」「異邦人の庭」と区切っていた。この区切りを越境することは許されなかった。職業、性、民族の差別構造を持つ神殿であった訳である。エルサレム神殿は、建築に長けたローマ人でさえ感嘆するほどの大寺院であった。イスラエル人の魂の故郷であり、ローマの属国にされた屈辱を晴らす、民族の誇りでもあった。一番外側の異邦人の庭に2種類の商人たちがいた。一つは「両替屋」である。祭には世界に散らされていたユダヤ人（ディアスポラ）が巡礼に帰ってくる。彼らは生活している国の貨幣を持って来る。しかし、神殿への献金はユダヤの貨幣でなければならなかった。外国貨幣をユダヤ貨幣に両替する商人たちがいた。もう一つは、神殿に献げるいけにえの羊や鳩を売る商人たちである。商人たちが商売するところは「アンナス広場」と言われていた。アンナスは、時の大祭司カイアファの岳父で、実質的に神殿を支配する陰の最高権力者であった。アンナス広場での利益はアンナスのところにもたらされていた。

いけにえの動物は通常の15倍の値段が付けられていたという。しかし、外から持ち込むことは禁じられ、清められたアンナス広場の動物を買わなければならないと定められていた。両替も相当な手数料を取っていたに違いない。この暴利はアンナスのものになっていた。権力を維持するためには財力が必要であった訳である。

主イエスは、不当な商売をしている商人たちを暴力的に追い出し「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家でなければならぬ。』／ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にした」と抗議し、怒った。この「宮清め」によって、エルサレム神殿が清められることはない。強大な宗教的権力を持つ神殿に対し、一介の野にあるラビ（ユダヤ教の教師）が抗議したので、神殿当局は、主イエス殺害を謀るようになったことは容易に想像できる。民衆は、憧れのエルサレム神殿に来てみると、法外な値段のいけにえを売りつけられ、不満であるが抵抗できない。主イエスの抗議に溜飲が下がる思いで、主イエスの言動に大賛同した。彼らの支持があるので、神殿当局は歯ぎしりしながらも、その場では手出しすることができなかった。神殿がメンツを潰された「宮清め」から、主イエスと神殿当局の激しい闘いが始まり、受難週は一気に緊張が高まっていった。

神殿当局の殺意の中、主イエスは毎日、境内で臆することなく教え、民衆は聞き入っていた。主イエスは神の真理について語られただろう。神の真理とは神から愛されている人間の尊厳で、これを聞いた民衆の喜びが目の前に見えるようである。

宗教とお金の癒着問題は、どの宗教でも、どの時代でも見られる醜態である。お金と権力から自由でなければ、人を真に生かす宗教にはなり得ない。「宮清め」は主イエスのパフォーマンスであるが、ここから学ぶことは多い。